

夕張岳産の隔離分布種について(2)

刈谷市 野坂志朗

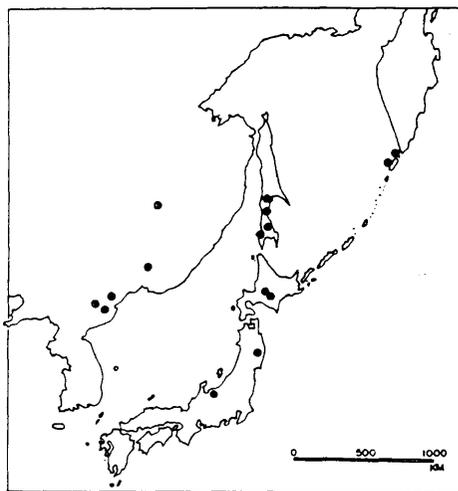
7 タカネシバスゲ (*Carex capillaris* LINNAEUS) 第1図

夕張岳高山帯の蛇紋岩礫地上に成立するユキバヒゴタイ・ユウバリソウ群落及びその周辺部のまばらな群落構成種の一つで、次のタカネヒメスゲとともに見られる。

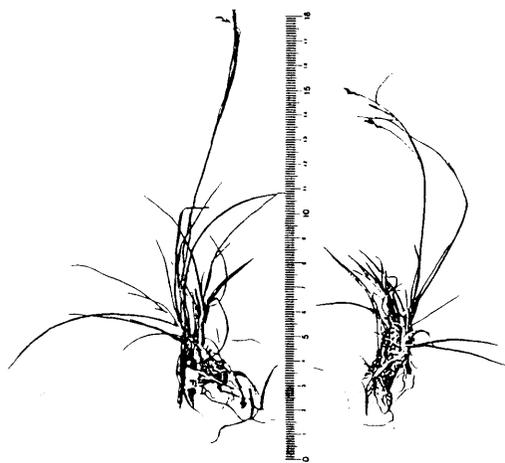
稈の高さ15cm程度の小さなスゲで、先端がやや垂れ下がる。リンネが1753年に記載した *C. capillaris* は、広く周極分布をする種で、稈の高さ20cm以上に達し、雌小穂の長さが7mm前後であるのに比して、ヒマラヤ・ウスリー等に産するものは、全体やや小形であるが雌小穂の長さがしばしば1cm以上あることにより、東アジア地域の亜種

(subsp. *chlorostachys* LÖVE et LÖVE et RAYMOND) として区別する見解がある。この見解に従うならば、夕張岳をはじめ本邦産のものは、*C. capillaris* L. ssp. *chlorostachys* LÖVE et LÖVE et RAYMOND となる。

第2図 タカネシバスゲの本邦及び近隣地域での分布 (野坂、1974より)



第1図 タカネシバスゲ



北海道での産地は、夕張岳のほかトツタベツ岳 (大場達之氏、1968年) のみであり、本州での産地も岩手県早池峯山と北アルプス白馬岳のみであって、いずれも超塩基性岩よりなる山岳である。氷期の植物が超塩基性岩高山に遺存した一例と考えられる。

近縁種にオノエスゲ (*C. tenuiformis* LÉV.

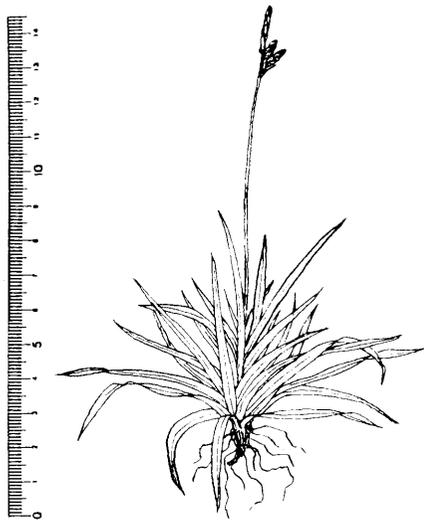
et VAN.)があるが、両者は次のように区別される。

●葉の幅は1.5 mm程度。側小穂（雌性）は長柄があって頂小穂（雄性）より超出し、垂れ下がる。……………タカネシバスケ

●葉の幅は2～4 mm、側小穂（雌性）は頂小穂（雄性）より超出せず、垂れ下がらない。……………オノエスケ

オノエスケは、仏人 FAURIE が採集した礼文島産標本に基づいて LÉVEILLÉ と VANIOT により1902年記載発表された。中国東北部・北朝鮮高山・ウスリー・ダフリア・サハリン・南千島等の日本海をめぐるアジア東北部の寒地・高山に分布し、北海道では、礼文島・幌尻岳等日高山脈の一部・ニセイカウシュベ山、黒岳、桂月岳等中央高地（大雪山）に知られ、本州では早池峯山・白馬岳・南アルプス北岳等に知られるのみである。

第3図 タカネヒメスケ



8 タカネヒメスケ (*Carex melanocarpa* CHAMISSO) 第3図

ドイツの著名なナチュラリスト A. L. von CHAMISSO により、東部シベリア産標本に基づいて1847年記載発表された種である。

夕張岳ではタカネシバスケの産地と同じ立地の群落構成種である。

本種の側小穂はほとんど無柄で頂小穂の下に1または2個密着している。

東部シベリア・ダフリア・サハリンに分布し、本邦における既知の産地は夕張岳のみである。

近縁種にヌイオスケ (*C. vanheurckii* J. MÜLLER) があるが、両者は次のように区別される。

●雌花穎は円頭で縁辺に毛がある。果胞は長さ約2 mm。……………タカネヒメスケ

●雌花穎は鋭頭で無毛。果胞は長さ3 mm程度で先端は0.5 mmのくちばしとなる。……………ヌイオスケ

夕張岳にはこれら両種とも産するが、ヌイオスケは少ない。ヌイオスケの分布域はオノエスケの分布域に中・北千島及びカムチャッカを加えた範囲で、カムチャッカ産の標本に基づいて1870年 MÜLLER により記載発表された。本邦内の産地は、北海道では夕張岳・北見ポロヌプリ及び中央高地の高根が原、本州では八ヶ岳・北アルプス・月山・至仏山等である。白馬岳のものは本田正次博士により *C. pseudowrightii* HONDA (シロウマヒメスケ) として1929年植物学雑誌第43巻に発表されたものと同物である。

9 クモマシバスケ (*Carex subumbellata* MEINSHAUSEN, ミヤケスケ)

FR. SCHMIDT (1868年の樺太植物誌の著者) と GLEHN が北サハリンのアレクサンドロフスク近郊ズイで採集した標本に基づき、1901年、ソビエトの NEINSHAUSEN が記載発表した種で、既知の分布域は、サハリン、北朝鮮及び本邦である。

樺太植物誌 (宮部・三宅、1915年) の著者の一人三宅勉氏が、サハリンでは邦人として初めてこの種を採集したのに因み、同植物誌 543 頁において「ミヤケスケ」の和名が与えられた。いっぽう、白馬岳等に産するものに対しては「クモマシバスケ」の和名があり、*C. heribaudiana* LÉV. et VAN. や *C. artinux* C. B. CLARKE 等の学名が当てられたこともあったが、1931年、大井次三郎博士により、*C. subumbellata* の、小穂が稈頂に集まり、苞葉が超出する変種として位置づけられ、*C. subumbellata* MEINSH. var. *verecunda* OHWI とされた。同時に、北朝鮮高山産のものは、下方の小穂に長柄のある変種 var. *koreana* OHWI (チョウセンクモマシバスケ) として区別された。

変種の区別をしない見解の学者は、和名としてすべて「クモマシバスケ」を用いているが、変種の区別を認めるならば、サハリン及び夕張岳のものはミヤケスケ、本州 (白馬岳・妙高山・八ヶ岳・北岳・白山・至仏山等) のものはクモマシバスケ、朝鮮のものはチョウセンクモマシバスケとなり、サハリン産のものと同型のもの (母種) は夕張岳のみに産することになる。

10 ホソバウキミクリ (*Sparganium angustifolium* MICHAUX)

大著 *Flora Boreari-Americana* で知られる仏人 ANDRÉ MICHAUX により、カナダを基準産地として1803年記載発表された。

これに対し、

11 チシマミクリ (*Sparganium hyperboreum* LAESTADIUS, 第4図) は、ラブランドの牧師で植物学者の LARS LEVI LAESTADIUS により、ラブランドを基準産地として1853年に記載発表された。

両種とも典型的周極分布種で、次のように区別される。

●葉は幅 3 ~ 5 mm で、中肋は明瞭。雄性頭花は 2 ~ 4 個。雌花の花柱の長さは 2 ~ 2.5 mm、堅果は長さ 5 mm 前後で約 1 mm の長さの柄がある。……………ホソバウキミクリ

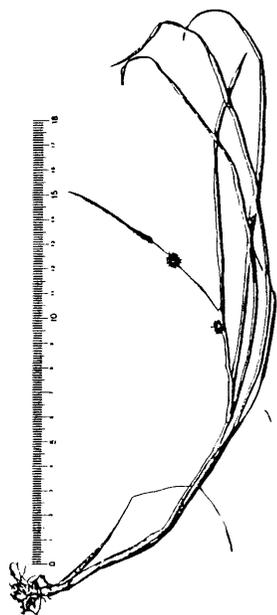
●葉は幅 1 ~ 3 mm で中肋は不明瞭。雄性頭花は 1 個か稀に 2 個。雌花の花柱は短く、長さ 0.5 mm、堅果は長さ 3 mm 前後で無柄。……………チシマミクリ

両種とも浅い池沼中に生じる浮葉性植物で、低地の池沼に見られるミクリ、タマミクリ、エメミクリ等が、茎が直立して植物体の根部を除く大部分を水面上数十 cm、ミクリでは 1 m 以上の高さまで伸ばすのに対し、茎の上端部以外は茎・葉とも横にねて水面に浮く。7 月下旬から 8 月下旬にかけての花~果実の時期以外は、あまり人目につかない。

北海道で採集されたものについては、前者が後者よりかなり剛壮に見える。

両種とも本邦における既知の産地は夕張

第4図 チシマミクリ



岳と大雪山のみであり、稀産種である。

上図は夕張岳産のもの。

12 シロウマチドリ (*Platanthera hyperborea* (L.) LINDLEY)

リンネの記載した *Orchis hyperborea* を1830年にイギリスの JOHN LINDLEY が *Platanthera* 属(フランスの L.C. RICHARD が設立したツレサギソウ属)に移して上記の学名を与えたものである。

東はアイスランドからカナダ・アラスカ・アリューシャン・カムチャッカを経て千島・本邦まで分布する。種の範囲や学名の取り扱いについては様々な見解がある。

アラスカ本土以东のものは、唇弁基部が広がって狭三角形となり、葉は細く皮針形であって、これを *P. hyperborea* とし、アラスカ半島以西のものは、唇弁が線形で、葉の幅がやや広く長楕円状皮針形であるこ

とにより別種とし、ソビエトの FISCHER がカムチャッカ産標本に基づいて記載した *Orchis convallariaefolia* FISCHER を1835年に LINDLEY が *Platanthera* 属に移した *P. convallariaefolia* (FISCH.) LINDLEY とする見解もある。この見解によると本邦産のものは *P. convallariaefolia* (FISCH.) LINDLEY となる。

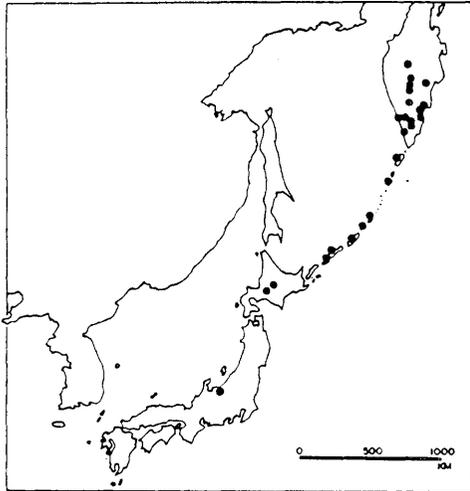
いっぽう、CHAMISSO は、アラスカの *Habenaria* 属の1種として、*Habenaria borealis* を記載発表し、1835年、これに2変種を区別して、白色花で唇弁基部の幅が広いものを *var. dilatata*、西部産(基準標本はアリューシャン列島のウナラスカ島産のもの)で花が緑色、唇弁が線形のを *var. viridiflora* としたが、後者がシロウマチドリに当てはまると見て、北村四郎博士は *P. hyperborea* の変種として CHAMISSO の変種を移し、*P. hyperborea* (L.) LINDLEY *var. viridiflora* (CHAM.) KITAMURA という組み合わせを1964年に発表し、この見解を支持する学者もある。

本邦では、はじめ、東大の矢部吉禎博士により白馬岳固有種として *Platanthera makinoi* YABE が1903年に植物学雑誌第17巻に記載発表された。その後、立山・南アルプス諸山・木曾駒ヶ岳の産が報告され、夕張岳では、1913年の柳澤秀雄・西田彰三両氏の採集標本がもっとも古い記録である。

1929年、スウェーデンの E. HULTÉN 博士がその著カムチャッカ植物誌の中で、*P. makinoi* = *P. hyperborea* とし、爾来、本邦ではこの見解が支持されている。北海道では夕張岳及びその南の屏風山のほか大雪

山にも産する。

第5図 シロウマチドリの本邦及び
近隣地域での分布



花は黄緑色であり日立たないが、かなり白っぽいものもある。屏風山産のものは葉がかなり細く皮針形に近いものもある。

スズラン (ユリ科) について

札幌市 山谷吉蔵

スズラン属には北半球に3種あり、①温帯アジア（北海道、本州、九州の高原、カラフト、東シベリア、中国、朝鮮半島）に広く分布しているもの、②ドイツスズランはヨーロッパ原産で、日本のものより葉はやや小型であるが花が大きく、香が強い。③アメリカスズランは東部のアパラチア山脈一帯に自生している。

一般に大型と云われているスズランには、

全草に強心配糖体のコンバトキシンを含んでおり、根や根茎と共に強心、利尿として生薬、製薬の原料とする。スズランの花を摘んでコップに挿し、その水を飲むと中毒をおこすと云われているのもそのためである。

アイヌは「毒の花」といって親しまなかつたし、牛や馬もスズラン、リンドウ、トリカブトにはふりむきもしないので、牧野